

智積院所蔵「楓図壁貼付絵」の 現状模写及び検証

安原成美（東京藝術大学大学院）

原本について

京都智積院所蔵「楓図貼付絵」（以下本図と略す）は、智積院の前身である祥雲寺客殿の障壁画として描かれた。描いたのは長谷川等伯とされている。祥雲寺は天正19年（1591）愛児・鶴松（棄丸）の菩提を弔うために豊臣秀吉が創建した禅宗寺院で、天和2年（1682）7月の護摩堂から発した火災で灰塵に帰してしまう。その際、幸いにも障壁画の主要部分は持ち出され焼失を免れる。焼失を免れた障壁画は、のちに再建された客殿や大書院などの障壁画に転用された。その後、明治25年（1892）の盗難や昭和23年（1947）の火災で、その一部が失われはしたものの、連続した4面と不連続の2面が残っているほか、本図中央2面の下方から切り取られ宸殿違棚上袋小襖に転用された4面が残っている。本研究で現状模写を行ったのは、連続する4面のうち中央2面である。



原本：国宝 紙本金地着色 「楓図壁貼付絵」四面 京都智積院蔵 各縦172.5cm 横139.5cm 16世紀

熟覧調査による原本の現状と考察

先述した経緯により障壁画は切り詰めや継ぎ足しなどの改変の跡が著しく、かなり錯綜した状態にあるが画面全体的には、楓樹の枝ぶりや草花の様子など描かれている内容はよく確認することができ、堂々たるスケールをもって表された樹木は桃山時代の大らかな気風をよく伝えている。実物大以上の楓樹の巨幹が斜めに立ち上がり、左右に勢いよくその枝を伸長させており、背地の金と楓の葉や草花などに施された色彩の鮮烈なまでの対比表現には等伯の独自性がはっきりと見て取れる。しかし、楓樹や草花の前後関係や個々のつながりなど細部の描写は判然としない部分が多い。彩色箇所においては、画面下部と画面の境目になる部分の剥落、褪色が甚だしい。特に画面の境目になる部分には楓の幹が描かれているが、楓の葉や萩の葉のまわりだけに見られる剥落などは、不自然であり人為的なものである可能性が高いと考えられる。また、盛り上げ胡粉で描写された菊の花などの剥落箇所では、本紙に墨線で描かれた下書きが確認できた。

金地は縁蓋の手法とそれ以外の手法の併用により、楓樹草花の細部まで除けて塗られ金箔が貼られていることが確認できた。

模写制作

〈本紙〉

模写に使用する本紙は、原本と同じように、雁皮紙の間に合いを継いで制作することにした。

・紙継

原本において左手の画面は、14枚の紙を継いで出来ており、右手の画面は12枚の紙を継いで出来ている。模写に使用する本紙も原図と同寸で紙継を行った。

その後、八女紙で増し裏打ちを行ない毛氈の上で十分に乾燥させた後に、再度湿りを与えてパネルに貼り込んで本紙の準備が終わる。

〈金地の再現〉

・墨線描き

上げ写しをした図像を念紙によって転写し墨線で描きおこす。

・箔足部分の再現

原本と箔の風合いを同じにするため、原本の箔足部分を念紙で本紙に転写し箔足部分にだけ金箔を膠水で貼りつけていく。やり直しの効かない工程であるので、時間はかかるが原本の状態をよく観察し理解しながら、箔足の再現作業を進めていった。

・縁蓋

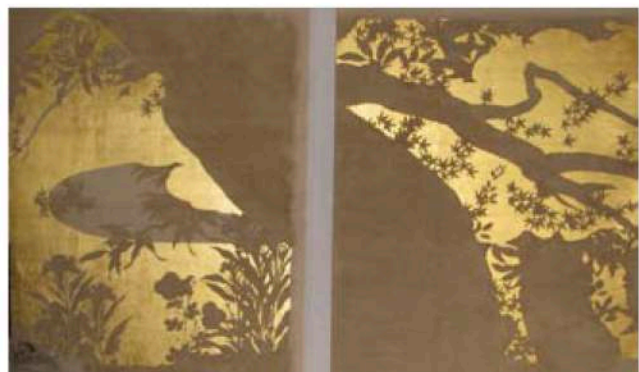
岩・地面・金雲・幹・主枝に薄美濃紙を麩のりで貼り付けマスキングする

・金箔押し作業

画面上部より箔を膠水で貼り付けていく。縁蓋をしていない楓の葉や草花などの図像は、箔を貼るための膠水を塗り残すことで、避けて貼ることが出来た。箔の重なりも原本と同じになるよう、縁蓋をしていない図像においては、図像の内側に平均して五厘程度金箔が貼りつくようにしたいため、画面を適度に乾燥させながら一枚一枚慎重に貼っていった。乾燥後に縁蓋として貼ってあった薄美濃紙を剥がし、余分な箔を刷毛で画面からよく落としたあとにドーサ引きを行った。左手画面上部の水面、リンドウ、萩の花、以外はすべて図像を避けて金箔を貼った。



縁蓋を施した状態



金箔を貼り終えた状態

・古色づけ

ナイロン刷毛で箔の表面を荒らした後に古色を塗ることで箔足部分が浮かび上がってくる。古色は焼白緑、黄土、朱のそれぞれ上澄みを使用した。

彩色作業

箔を押すことで消えてしまった輪郭線を、墨で描き起こした。次に幹や枝などに施されていた墨描きを再現していく。剥落状況の情報を念紙で本紙に写し、それをもとに原本と同質の顔料で彩色を施していく。下地となる白緑・胡粉・朱を中心に剥落状況を再現しながら絵の具を塗り重ねていった。下地の情報をもとに彩色を重ね絵の具に厚みを持たせていく。菊の花、鶏頭、萩の花、木犀の花に盛り上げ胡粉を施した。



模写作業風景



熟覧風景

〈熟覧〉

全体に彩色がはいた段階でパネルから剥がしめくりの状態にして、智積院の許可のもと智積院宝物館に模写を持ち込み原本と比較した。主に彩色の色合いや厚み、風合いなどを確認した。

〈仕上げ〉

原本と直接比較することで得られた情報をもとに模写を仕上げる。仕上がった模写は、予め準備していた骨下地に貼り付け和額装に仕立てた。



完成した模写

模写を通じて得た知見・結果

・金地について

目視による調査から金箔を貼る前はかなり細部まで具体的な下書きが存在することが確認されたので、模写においても図像を本紙に墨線で描いてから金箔を適所に貼った。また、金地と図像の境目の形状から、縁蓋されていたと考えた箇所は同じように縁蓋をして箔を貼り、同様に図像を避けて膠水を塗り箔を貼り付けたと推測した箇所は同じ手法で貼り付けた。結果として箔と図像の境目の形状が原本と近いものになり、金箔を貼る際の図像の避け方として2つの技法を併用していたことを確認することができた。縁蓋の手法によるものは楓の幹と、左右に伸びた太い枝、水月形の水面、画面右手下部の木犀の幹と、岩、地面である。それ以外の手法によるものは、楓の葉、鶏頭、菊、萩の葉、木犀の花と葉である。また、金箔を貼った上に後から描かれたものも確認できた。画面左上上部の水面、萩の花、リンドウ、画面左中央の楓の枝である。リンドウや萩の花は計画的に描かれたものと考えられるが、左上上部の水面や左中央の枝は、当初の計画にはなく、等伯自身による修正か襖絵から壁貼付絵に改変された折に加筆されたものではないかと推測される。

・彩色について

模写作業を進める中で葉や草の緑は下地に白緑を厚く単調に塗り、その上に草花の種類や箇所によって、緑青が差をつけて塗られ、最後に有機染料で仕上げていることが分かった。同様に鶏頭の花や萩の花も、盛り上げ胡粉の上に有機染料が塗られていた形跡がある。鶏頭は黄色か橙色、萩の花は桃色を表現していたと想像される。楓の葉の彩色においても白緑、緑青、朱以外にも褪色して、粒子のみが残る顔料の存在が確認できた。黄色系の顔料と推測され、楓の葉が緑から赤に紅葉していく様子を表現していたと想像される。以上のことから本図には褪色して失われてしまったが、現在確認することのできる色よりも遥かに複雑で豊かな彩色が存在していたことが、明らかになった。

・後補について

模写をしていく中で、剥落にも自然に剥落したものと、人為的に剥落させたものがあるのではないかと目視による調査結果について再確認することができた。特に幹の形状が非常に不自然であり、他の部分と同じ種類の図像でも、剥落度合や絵の具の厚みが明らかに異なる。ここには、加筆の形跡も見られないので、等伯自身が修正したものではなく改変時に画面どうしの繋がりの不自然さを解消するためのものであると考えられた。このように本図には、後世の人による加筆修正が多く入っていることが明らかになった。

・長谷川等伯による加筆、修正

本図の中では等伯自身による図像の描き変えや描き足しなどにより画面の構図などを微調整した跡とみられる箇所も存在する。例えば画面左上上部の水面や画面右手に伸びる枝など、改変時画面同士の繋がりの不自然さとは関係のない画面中央部にも加筆修正が見られ、それらの調整は楓樹や草花の細部に至るまで行われた形跡があつた。このことから本図は、構図や楓樹、草花の描写など、画面全体の大きな形象から細かい対象にまで神経が配られ、微調整が繰り返されていた形跡を確認することができた。

〈参考文献〉『日本の国宝』70号 1998年 朝日新聞社／山根有三「智積院」1964年 中央公論美術出版／山根有三「智積院障壁画の研究」『國華』85号巻子装における総裏紙の研究／水尾比呂志編「智積院」〔障壁画全集〕1 昭和41年 美術出版社／土井次義「智積院の障壁画」〔美術と工芸〕53 昭和36年